

主な労苦の実態

愛媛県 江崎 萬策

昭和十八年三月からの現役兵時代は、旧制高専卒で幹部候補生を志願したため、内務班ではとくに古年兵の私的せいさいの対象とされた。

ある夜点呼のあと、初年兵全体への「みせしめだ」と称し、革のうわばきによって顔を七十数回にわたっておう打されるというせいさいを受け、あごがはずれた。しかし、医務室ではあごをつるのみのしよちで、練兵休はあたえられず終日演習に参加させられた。もちろん食事はぬきであった。

昭和十九年七月、陸軍経理学校を卒業、幹部候補生となり臺北派遣軍司令部づきを下命され門司出港、台湾高雄を経由して南方に転進した。

ある夜、バシイ海峡で左側航行中のタンカーが潜水艦により撃沈され、その焼けた破片で当方甲板上におうが

していた兵が多数戦死した。このときの船団損害は十六隻中六隻を失ったことである。フィリピン・マニラで船待ちののち、同年八月本船二隻（いずれも四千トン級の貨物船）護衛艦（駆逐艦）四隻の船団編成でマニラを出港、一路インドネシアに向かったが、セブ島附近を僚船「はーぶる丸」がスクリーニャフトをせっそんずるといふ事故をおこし航行不能におちいった。駆潜艇にえいこうされホロ島に引き返し、私たち乗船の「メキシコ丸」は単独となり駆潜艇二隻にまもられてセレベス島メナド港をめざして南下した。

八月二十九日午前二時四十八分、米潜水艦（艦名ジャック）の魚雷攻撃を受けた。同時に駆潜艇一隻も轟沈した。「メキシコ丸」は一時間ほどなお浮いていたが、第一船倉の爆発から積荷の各種砲弾・弾薬・ガソリン類に引火しやがて沈没した。それから二日にわたる長い長い漂流が始まり三十八時間後、SOSを受信したフィリピン、ボルネオ、メナドの各海軍基地から出動した艦艇によって救助された。この時の戦死者は二千余人に及んだよしである。

かくして上陸したメナドでもその夜空爆があり、またいく人かの犠牲者がでた。

北部セレベスで司令部勤務をししばらくした私は戦況の悪化に伴い転進を命ぜられ南部セレベスへと小型船舶による海上輸送に従事した。このときも敵戦闘機PSSの機銃掃射を受けたが船が小さいためか難をのがれた。移動した南部セレベスではいずれ玉砕をいとした司令部の命で山岳地帯にトーチカ陣地をこうちくすることとなった。私は後方勤務として司令部トンネル作戦室や将官宿舎の建設にジャワで募集したインドネシア兵補を使役し従事した。これら兵補は終戦後義勇軍を結成し、一部逃亡し、日本軍下士官と共に独立戦争に参加したのである。その任務を終わったのち、経理官としての勤務に就いた。

二十年二月頃、カロシという小さな集積所を開設し漁猟隊軍属を指揮し、ネシヤ住民へ種子を提供し野菜の栽培を依頼、その集散をおこない第一戦築城部隊へ支給した。その日、納入品に対する代価計算作業中、米軍ロッキードP38戦闘機二機の銃撃を受けた。軍刀をわしずか

みに外に出た私はヤシの根元に身を伏せてその銃撃をさけた。あとでみると事務所の壁がうちぬかれ机のなかに機関砲の弾丸が三つ四つころがっていた。もしそのまま座席していたらまちがいなく戦死していたのである。

その月、私の命令で本部へ資金受領にいかせた土屋軍属は乗車していたトラックが銃撃を受け、携行中の軍票十万ルピアを焼失せしめた。これは本来なら軍法会議にかげられるところであったが、さいわい、終戦でその難はのがれた。

終戦後は、その集積所に貯蔵した糧秣・衣料・住民に栽培を依頼していた野菜類をアリンブンに集結させられた。陸・海・民間約二万人の捕虜の補給にあてた。その間、逃亡中の下士官・兵四人を救出したり、どうしても逃亡を続けるという少年戦車兵軍曹に糧秣をあたえたり、オランダ軍と戦うインドネシア義勇軍に糧秣・衣料・弾薬の援助をおこなったりと結構スリルにみちた生活を通じた。

カロシに滞在中、首長・郡長・村長たちと親しくつきあっていただおかげで、終戦後もなにかとお世話になっ

た。首長は戦後オランダ軍大尉となり、私の集積所在動
中も便宜をはかっていただいた。そして、引き揚げ時に
は港まで見送りを受け、オランダ軍の無法むたいな仕打
ちからかばっていただいた。

私たちの復員船は最後に近い便の米軍LSTであつ
た。船内給与はすべて自給自足、内地からの補給は受け
ずまかなった。また甘味品やチリ紙も支給し、記念とし
てコーヒー豆も茶碗二杯分ずつ配給した。

六月十六日和歌山県田辺港に上陸復員したが、その夜
「総括」と称し下級兵士による上官つるしあげがおこな
われた。さいわい、私は仕返しにあわずすんだが、上官
のなかにはひどい仕返しを食った者もあった。ある中隊
長のごときはいちはやく逃亡し、復員証明書・帰省旅費
も受けなかったということである。

南海孤島での守備隊

神奈川県 萱野 明

北支派遣軍でかくかくたる武勲によくした第三十五師
団（東兵团）に南方戦線転出の天命がくだった。ときに
昭和十九年三月初旬であつた。

物量をほこる敵連合軍の攻勢のまえに守勢に転じ、し
だいに圧迫され、ガダルカナル島をはじめ多くの島嶼を
失い戦雲急をつけつつあつた。東第二九二九部隊（潜水
部隊）は青島の桜ヶ丘に各連隊と共に集結す。十日間滞
在して、弾薬、食糧を補給する。輸送船団は十一船団と
なり、夜中出航する。

このころ米軍の制空、制海権のため移動もままになら
ず、南海に直行できないはめとなり門司にむかつたが、
さらに状況悪化のため横浜港へと航路を変更する。横浜
の高島栈橋に一週間碇泊、やっと父島にむかつて出港し
ました。